

## 琵琶湖における「流れ藻」の正体

### はじめに

近年、琵琶湖の湖岸帯では水草が水中で異常に繁茂し、漁船や遊覧船などのスクリューに絡み付き、船の航行の妨げとなっています。また、水草が成長後、湖底付近の茎が切れて浮かび上がり、大きな塊となって浮遊したりすることがあります。このように根のない水草の塊を、「流れ藻」と呼んでいます。この「流れ藻」が集まり湖岸へ漂着すると、それが景観的に不快感を与えたり、分解して異臭を放ったり、湖流を妨害したり、また、水質にも悪い影響を及ぼすと考えられます。この「流れ藻」にはどんな種類があるのでしょうか？

今回は、このような疑問に迫りたいと思います。

### 流れ藻の正体

平成 15 年 8～11 月にかけて当センターでは、南湖沿岸帯における水草の分布調査の中で、「流れ藻」となって浮遊していた水草を採集し観察しました。その結果、「流れ藻」となっていたのは**クロモ(写真1)**が最も多く、次いで、**ホザキノフサモ(写真 2)**、**マツモ(写真 3)**の順でした。そして、モーターボートのスクリューに巻き付きやすい種類はホザキノフサモで、水面にまで茎が達していました。しかし、湖底における水草の現存量が最も多かった種類は**センニンモ(写真 4)**であり、次いで**オオカナダモ(写真 5)**、ホザキノフサモの順番でした。水草は通常、湖底に根をはり、茎や葉を伸ばし、花をつけ、一年の大半を湖底付近で生活しますが、クロモやホザキノフサモ、コカナダモなどは成長すると長く伸び、湖底付近で茎が切れ、浮き上がり「流れ藻」となりやすい種類であると考えられます。また、マツモは根がなく水中に漂って生活をする種類であり、特に「流れ藻」になりやすいと考えられます。しかし、センニンモなどは地下茎が発達し、芝生のように湖底を覆うように広がる性質があり、「流れ藻」にはなりにくく、また、大型種であるオオカナダモは太くて堅い茎を持っているため、成長しても茎が切れ難く、そのまま越冬するものも多いと考えられます。

早朝、琵琶湖の湖岸を散策する時、そっと打ち上げられた「流れ藻」を手にとって見るのも趣があるのでは……



写真 1.  
クロモ

在来種で、1 節から出る葉の枚数が 6 枚のものが多い。8～10 月に流れ藻となる。



写真 2.  
ホザキノフサモ

在来種で、葉は細裂した羽状葉である。水面上にまで伸びて開花する。



写真 3.  
マツモ

在来種であり、根がなく水中を漂って、たどり着いた場所で生活する。



写真 4.  
センニンモ:

在来種で、地下茎から一節おきに水中茎が伸びる。芝生のように湖底を覆いつくすような大群落を形成する。



写真 5.  
オオカナダモ

外来種の多年生水草で、1 節から出る葉の数が 4 枚のものが多い。大型の種類である。冬季もで枯れずに、そのまま越冬する。

【琵琶湖水質担当】